

寛政甲寅考試書類三種——その一

戸出一郎・町泉寿郎¹⁾

資料解題

明和二年(一七六五)、多紀玉池元孝により創設された「躋寿館」は、翌年、その死により嗣子藍溪元恵が家督継承と共に、躋寿館の督事をも相続した。天明七年(一七八七)、老中首座に就いた松平定信は、かねて医師、特に幕府医官に対する再教育の必要を感じていたので、寛政三年(一七九一)に躋寿館を幕府直轄の医学校とし、その名も「医学館」と改めて、元恵を督事として教育に当らしめ、校務一切を幕府の公費をもって賄った。医学館の教育は嚴格を極め、古典の学習・臨床実習等が課せられたが、その成果を計るため、また更に学生の奮起を促すため、毎年春秋二回に考試(試験)を行った。試験記録は今のところ寛政六年のもののみ伝存する。

寛政六年の記録は「寛政甲寅考試口問主意書」(以下「口問主意書」)、「寛政甲寅考試問答一件調書」(以下「問答一件調書」)、「寛政甲寅考試医案方付留記」(以下「医案方付留記」)の三部で、現在、京都大学図書館富士川文庫に所蔵される。和綴本各一冊(全三冊)に、問題・解答・批評を詳しく墨書したものである。表紙は後補で渋い朽葉色、右の各標題を記した題簽とラベル「富士川本/カ/39」を貼付する。記録用

紙にはやや硬い縦二五cm・幅三五cm(すなわち半紙)の和紙が用いられ、半折袋綴じにする。記録は上方を約五cm、下方を約一・五cmあげ、半丁に一〇行、一行おおむね一八〜二二字で記される。各冊丁数は「口問主意書」が三〇丁、「問答一件調書」が五四丁、「医案方付留記」が三四丁。三冊まとめて紺色布製の帙に収める。帙の表に「寛政甲寅考試問答主意書外二 三冊」、背に「寛政甲寅考試書類 三冊」と書した題簽を貼付する。各冊とも補配表紙に続いて原表紙があり「富士川游寄贈」「富士川家蔵本」の朱印が、巻首には「京都帝国大学図書之印」の朱印が押される。「問答一件調書」と「医案方付留記」では、問題と解答には黒墨を用い、各解答に対する指導医の品評には朱墨が用いられる。全体を通して書写状態は整然としており、明らかに浄書本である。数人の手蹟が混じり、字様に多紀元簡の筆跡と共通する特色があり、かつまれに誤写と思しき箇所がある点から判断して、元簡門人たちの手になるものと推定される。

翻刻凡例

- 一、活字化にあたり、できる限り原本の用字を改めず、誤脱と判断し私意によって改補した場合には補った字を丸括弧に入れる、または改めた字の後に(原本「何」と示した。
- 一、朱筆部分はすべて『』で囲って示した。
- 一、「口問主意書」については各科別に①②の如く番号を付し、「問答一件調書」では(問①)のように出題番号を記し

て問題との対照の便をはかった。

一、句読点を補い、また一部にゴチック体を用いて検出の便をはかった。

一、漢字はできるだけ通行字体を用いた。

一、改行は再現せず、改丁表裏末尾に例えば「一丁表を(一才)のごとくに示した。

翻刻

(外題) 寛政甲寅 考試 口問主意書 多紀永寿院
(内題) 口問主意書

本道之部

①一、人参敗毒散・参蘇飲・藿香正気散之三方相用候差別之事

右御尋候三方ハ後世之方書ニは何の書にも有之候得共、原は和剂局方ト申候方書ニ出候方ニ而、惟今世上医家病家共能投し、一通り引風ニ相用候事ニ而、至而手近き薬方ニ御座候。併此用ひかたニは差別御座候事ニ付、相尋候儀ニ御座候。人参敗毒散ハ同じ発表の薬の内ニも先ハ実(一才)人に用候方ニ而御座候。依之感冒の証、発熱・悪寒・頭痛并有之候上に口鼻の気熱し、或は骨節疼痛を目当に相用候旨、本邦の古人も申置候。参蘇飲是亦同様、感冒の証に発熱・頭痛等有之、其上欬嗽・吐痰を兼候類、胸膈不利・痰飲を挟候ニ用候。藿香正気散是亦同様、感冒の証に用候方ニ御座候へとも、内に

飲食停滞・脾胃不和を相兼、軽キ吐瀉・腹痛等有之候ニ相用候。依之、霍乱の軽症ニ相用申候儀も有之候。(一ウ)」

②一、真中風ト類中風之辨別并ニ治法大意之事

右相尋候主意ハ、病人卒倒仕、人事をわきまへ不申証に出合候節、是ハ真中風、是は類中風ト見分候而治療仕候儀ニ而御座候。此見分ケ相辨不申候てハ、卒倒病人に出合、治療仕候儀出来兼申候ニ付、相尋候儀ニ御座候。真中風ト申候ハ風邪卒に人の蔵に入り俄に倒れ人事を省ミ不申、世に申候卒中風にて則、真中風に御座候。類中風ト申候ハ中気とも気厥とも申候て、七情の気鬱結仕、上り逆して卒倒(二才)仕候。真中風は口眼喎斜有之候処、口眼喎斜無之も有之候。此見分ト申候ハ中風ハ脈浮身温に汗出痰涎有之候。中気は脈沈・身冷、汗も痰涎も無之候。此儀は古人の医書ニ散見仕罷在候。

但類中風ト申候てハ博キ病名にて、中気の外に食厥(食気停滯して卒倒仕候証に而候)、血厥(血上逆して卒倒仕候。血悶とも申候)、気虚卒倒(気虚脱仕卒倒仕候)、房劳卒倒(房事程を過し卒倒仕候。色厥とも申候)、劳役卒倒(劳役辛苦甚ク卒倒仕候)、痰厥(痰氣上逆卒倒仕候)、此類にて中風と見まがい申候。併病因懸隔仕、看法も有之(二ウ)治療も相違仕候。彼是甚多端成儀ニ付略申候。

中風病因の儀は内経并金匱要略より以降千金・外台等、宋朝までの医家ハ尽く外来の風邪、人身経絡荣衛血氣の虚に乗し口眼喎歪・半身不遂等の証を発し、若シ内蔵府ニ入候てハ

卒倒・痰涎壅盛、人事を不省、又ハ言語蹇澁、或精神昏乱等の証を發候旨述置申候。金元以来ニ至候てハ医師家々に説を立、劉河間ハ火より發り候ト申シ、李東垣ハ氣虚ト申シ、朱丹溪ハ濕痰死血ト申候(3才)て古人の説トハ相違仕候。併何れも一理有之、一偏に廢し候儀ニ而ハ無御座候。家々にて主張仕候説も可有之哉ト相尋候儀ニ御座候。中風治法の儀ハ最初卒倒の節より醒候後、漸々施治仕候儀ニ付、甚多端ニ御座候へ共、銘々心得之大意を相尋申候。答之趣ニ而委細申上候。

③ 一、中暑ト傷暑との辨別并治法之事

中暑ト傷暑トハ中寒ト傷寒ト申候如く、炎天之節、道途にて炎暑に中り氣閉塞仕、即時に自汗甚ク喘滿・氣急・悶倒仕候証を中(3ウ)暑ト申候。又夏月漸々に暑氣に傷れ、倦怠・少氣・發熱・頭痛等を發し候を傷暑ト申候。中暑ハ急証ニ候間、蘇合香円・來復丹・二氣丹の類にて氣を開き、陰陽を調和仕候へば醒申候。傷暑ハ緩証にて香薷飲・香薷湯・六和湯之類、証に従ひ撰用仕候。中暑・傷暑ト二ツニ分チ暑を論し候儀ハ、陳無沢三因方以後之儀ニ而御座候。又中熱・中暑ト二ツニ分ケ候説御座候。是ハ元ノ李東垣が説に、暑氣を深堂大廈ニ避ケ納涼仕過し候へハ頭痛・惡寒・發熱・手脚疼痛・無汗等の(4才)証を發候を中暑ト仕候。中熱ハ前条ニ認候傷暑ニて御座候。必竟、東垣の中暑ト申候ハ夏月の感冒にて、別段に治法を設ケ候ニ及不申、矢張感冒の藥ニ而事濟候旨、

明末の医共申候。

④ 一、乾霍乱・濕霍乱の差別治法之事

霍乱は夏月尤多ク有之候証に而何れも急症ニ候処、乾霍乱・濕霍乱之分別を弁へ不申、一概に霍乱トのみ心得候而治療仕候てハ大二事を誤り候儀故、相尋候儀ニ御座候。霍乱ハ一体、冷熱不調ニ而飲食程を過し或ハ(4ウ)飲食節を違へ、胃中に停滯仕、腹痛甚ク揮霍之間に煩悶撩乱仕候故、霍乱ト名付申候。其内に腹滿・絞痛・吐利無之候を乾霍乱ト名付候旨、病源候論ニ出申候。唯腹疼甚しく嘔吐・下利強きを濕霍乱ト名ケ候旨、外台秘要に出申候。乾霍乱は吐下の瀉劑を相用ひ、濕霍乱は温熱之補劑を用申候。右之通、治法霄壤の違ひ御座候。其上、変証多く治法亦多端ニ而御座候。唯大綱のみ申上候。

⑤ 一、自汗の証に石膏を用可申証、附子を用可申証、黄(5才)者を用可申証有之、差別如何之事

自汗ト申候は自然ト汗出候証ニ而候。此証、見証ハ同様ニ候へ共、石膏に宜キ証ハ一体熱因ニ而御座候。附子之証ハ一体、陰証裏寒之病ニ而御座候。石膏は大寒、附子大熱、反対之藥劑にて、取違へ用損候へば手掌を反候如く害有之候。然処ケ様ニ寒熱之相違は分明ニ相知可申答(原本「候舌」)二候へ共、存の外、仮熱仮寒ト申候儀有之候而、全体熱因の病ニも表江寒証を見し、又寒因之病ニ外証熱を見候。其内、脈洪大

有力・口舌乾燥、渴(5ウ)にて冷水を好み、小便赤渋、眼中赤ク蒸々トして発熱汗出候は石膏の証にて御座候。前証同様二候へ共、脈洪大無力又ハ沈細虚微、口中和し或ハ渴して熱湯を好み、小便清白、眼中冷ク熱不甚候て汗出候は附子之証ニ而御座候。乍併此二証之分別至而六ケ數、似て非なる者多く有之候間、容易なる修行ニ而ハ見分ケ兼申候。然ル処、此儀ハ常多ク有之候証ニ而、医者一同相心得不申候而は協不申候儀ニ御座候。黄耆之表虚ニ而自汗出候を表を固メ汗を止メ申候。此物格別性(6才)「偏無之故、附子添候へば芪附湯と申候而脱陽の自汗を止申候。又黄芩・黄连・黄柏に組合候へハ鬱熱の汗を止申候。此儀も虚実の弁別心得無之候てハ相用候儀出来兼申候。ケ様之儀ニ付、三種薬剤用方心得之儀相尋候儀ニ御座候。

⑥一、香蘇散・八解散・不換金正気散之三方共ニ感冒に用候薬方ニ候。用分ケ候差別如何之事

此三方共ニ和剂局方ニ出候は、世上医家病家共ニ引風之薬に相用申候。三方何れ方組之主意にハ差別有之候事ニ付、相尋候儀ニ御座候。(6ウ)「香蘇散ハ軽き感冒発散之中に胸膈の氣を開候功御座候。鬱を開き候へば一体の表氣も解候故、風寒邪氣表より発し申候。不換金正気散は蒼朮、君薬ト相見申候。此故ニ湿を去り并ニ中焦の氣を利し宿を消申候。又山嵐の瘴氣を除申候。八解散ハ一体六君子湯に厚朴・藿香を加候方故、虚人の軽き感冒を治申候。前の不換金ハ蒼朮にて発

散仕、此方ハ自汗多汗に用候へハ脾胃の氣平に復し候て津液汗となり(7才)「不申、相止申候。乍然、何れ軽症にのミ用申候方ニ而御座候。

⑦一、補中益気湯・六君子湯・異功散、皆補脾の剂ニて三方用様差別如何心得候哉之事

補中益気湯、元の李東垣立方にて御座候。六君子湯ハ和剂局方に出、異功散ハ宋の錢仲陽立方にて御座候。此三方、当时専ら世上相用、至而手近キ薬方ニ而御座候得共、用法差別御座候事ニ付、相尋候儀ニ御座候。補中益気湯ハ飲食節を失ひ七情度に過、脾(7ウ)「胃の元氣不足仕、発熱頭痛・四肢倦怠・煩喘不食等、清陽下陷仕候て内傷にて外感似候証を見シ申候ニ用申候。此外兼治多ク御座候得共、一体東垣之主意ハ右之通ニ御座候。内外傷を辨候儀は内外傷辨惑論に詳ニ相見申候。文繁ク御座候間、此処にハ省略仕候。六君子湯ハ脾胃氣虚、痰飲を生し、胸膈痞悶、食を嗜ミ不申ル証ニ相用申候。四君子湯の胃虚・停痰を治候方の上に猶亦半夏・陳皮を加へ利氣・除痰を強ク仕候方ニ而御座候。異功散ハ六君子湯同様之方ニは御座候得共、吐(8才)「瀉、食を思はず、唯脾胃氣虚のみにて留飲うすき証に相用申候。故に六君子湯に半夏を去り候方ニ而御座候。

⑧一、外感之証に汗を發候而宜キ証、又汗を發し候ては不宜証有之候。此差別は如何に候哉之事

外感は表に邪氣有之候儀ニ付、汗より邪氣発候は通例之儀ニ御座候処、人之強弱、一体氣血之有餘不足、外邪の淺深輕重により汗之取方ニも次第有之、又決して汗取候儀相成不申裏虚表病有之候。若汗を取り申間敷(8ウ)証に発汗仕候へハ、汗泄候て亡陽仕、輕きハ大病重きハ死に至り申候。又汗を取可申裏和表虚に汗を發シ不申候へハ邪氣鬱結仕、是又輕きハ大病重きハ死に至り申候。一通之表証にも麻黄湯を用候て一旦に汗を發候証も有之、又桂枝湯を用候て衛陽を養候へば自然と汗出邪退キ候証も有之、又挾陰之証ニは初より温補の薬を用候類、種々節目御座候。大抵可汗証十五ヶ条程、不可汗証十五ヶ条程有之候。此儀別而日用之儀ニ付(9オ)心得之程は大略を相尋候儀ニ御座候。

⑨一、尿血と血淋との差別如何心得候哉之事

尿血ハ小便より血出、血淋も小便より血出申候。同シ尿孔より血出候証ニ付、差別相尋候儀ニ御座候。血淋ハ五淋之一ニ候間、血出候節必ス渋痛有之候。又尿血は唯尿孔より血出候迄ニ而痛無之候。二証俱に治療之上にも差別有之候事ニ御座候。

⑩一、水腫に虚腫と実腫と差別見分方心得は如何に候哉之事
(9ウ)

水腫を治療仕候ニは、虚と実とを辨別不仕候而は利害反掌の間有之候。当時、世上別而多き病証ニ候間、此差別如何

相心得候哉相尋候儀ニ御座候。虚腫ハ陰水と申候て脾胃腎元の虚より発申候。其証、遍身腫軟に煩渴無之、大便自調又ハ澹泄仕、小便少クは候へとも赤渋不仕、脈弦浮微細或ハ沈遲細緊ニ而無根脚等の候を以て虚腫と仕候。実腫ハ陽水と申候而、脾胃敦阜・陽氣壅滯より発申候。其証、遍身腫硬ク煩渴して(10オ)湯水を好ミ、大便秘閉、小便赤ク渋りて濁有之、脈滑数等にて有力、此類の候有之候を実腫ト仕候。乍併、虚ニ似候実証有之、又実ニ似候虚証有之、甚辨難キ儀ニ御座候間、彼此参伍錯綜仕、診定仕候儀ニ御座候。此外にも看法有之候儀ニ御座候得共、前文認メ候は敵用和濟生方・張介賓景岳全書・張璐医通等之趣(二)て御座候。(10ウ)

小児科之部

①一、小兒生下之時、其兒之稟受厚薄ニ付、手充用薬之心得如何之事

此儀は古人の書并伝来家々之流儀区々に御座候。乍然先は生落、早速其兒之稟受之厚薄も見分り、虚実ニ依而夫々手充仕候儀は一同之事ニ候。其内、家家家伝仕竟にて格別之異見有之候も御座候得共、其用法に熟し候者ハ可然事ニ御座候。

此儀は小児科第一之先務ニ付、其大法相尋候儀ニ御座候。生下仕候而(11オ)髪稠色赤ク肥肉相堅ク啼声雄大なるハ稟受厚ク御座候。甘連湯・朱蜜法之類、腹鞭ク便秘にハ大黃等下剤相用候。必竟、稟受厚き兒は胎熱・胎毒有之候故之儀ニ而御座候。又髮稀に色白ク瘦せ、肉柔脆、啼声低小なるハ稟

受薄ク御座候間、人参劑相用元氣を取立候儀ニ御座候。又厚薄中分之児は甘草法を用候儀も御座候。右は古人手充之大略ニて御座候。此外、拭口法・浴見法・断齋法・灸臍法等有之候儀御座候得共、稟受之厚薄にて手充差別之(11ウ)「儀ハ最も当用之儀ニ付、相尋候儀ニ御座候。」

②一、痘瘡序熱之辨別如何心得候哉之事

此儀は痘瘡之初ノ発熱仕候処、痘序ニ候哉、外感之熱ニ候哉、分り兼候節、辨別仕候儀、小兒科緊要ニ御座候。幼科の書に、悪感仕候得共汗無之、頭痛脊強ク面色ハ慘と仕、さミしく氣舒不申様ニ相見候ハ、寒氣中リ抔外感ニ而御座候。又発熱仕両眼に涙を含ミ鼻息粗ク睡中に微く驚き候趣有之、耳後小紅之紋あらわれ熱たえ候而悪寒無之ハ痘序の熱ニ而御座候。惟睡中微驚と(12才)「鼻息粗キを第一之証驗と仕置候。此外、手之中指斗り冷、耳尻冷、或面赤腮紅に呵欠仕、或ハ手背之色と面色と同を目当に仕候抔申候説、種々有之候。何れ家々之診法、銘々の見覚可有之儀ニ付、相尋候事ニ御座候。」

③一、痘瘡虚実之看法大概之事

痘瘡虚実之儀ハ大抵四証ト申候而、毒壅・血熱・氣虚・血虚之四ニ、又表虚・表実・裏虚・裏実之四有之、右之四証ト合セ候へハ八証にて御座候。此八証之外候を審別仕治療仕候事ニ候処、見覚不申(12ウ)「妄ニ療治仕候而は相済不申、

小兒科之要務と仕候儀ニ付、相尋候事ニ御座候。八証之儀、甚繁多ニ付省略仕候。

④一、急驚風と慢驚風之差別并治法心得大法如何之事

是亦小兒科之要務ニ而御座候。急驚風之候ハ身熱面赤・搐搦上視・牙関緊硬・痰涎壅滯・風淚驚嚇仕候より発し、陽症実病ニ御座候故、療治仕方も清涼鎮墜之劑相用候儀ニ御座候。又慢驚風と申候は大抵吐瀉仕候以後に発申し候。証候ハ(13才)「微ク上視仕、口鼻の氣息冷に大小便清白にて、昏睡仕候に露晴と申候而眼を半開に仕、筋脈拘急仕候。前之急驚風とハ反对にて陰証虚寒に属し申候。畢竟、脾土極虚・中氣不足仕候より起り候。唐土の諺にも急驚人を驚かして医を驚かさず、慢驚医を驚かして人を驚かさずと申し候儀有之、此二証似より候て虚実懸隔仕候故、心得違有之間敷候へ共、相尋候儀ニ御座候。」

⑤一、泄瀉の証に七味白朮散・胃苓湯・附子理中湯用法之(13ウ)「差別如何之事

此三方ハ小兒泄瀉に用候方ニ而御座候。七味白朮散ハ宋の錢仲陽立方ニ而、脾胃虚し津液不足仕、口乾キ渴有之候証に用申候。渴泄之聖劑也と陳復正が幼々集成にも申置候。胃苓湯ハ平胃散・五苓散合方にて婦人大全良方に出申候。一名、金対飲子と申候。暑湿に停食停飲等相兼、水(原本「氷」)穀分利を違へ、腹痛泄瀉、大便水のごとく小便短小なるに用申候。

理中湯ハ脾胃虚寒之証にて、腹痛等相兼（14才）、面色青慘、腹按之痛無く快寛、大便臭気なく脈沈微或は浮虚の証に用申候。若右之証に四肢厥冷等、虚寒甚キ候有之候へバ附子を加へ附子理中湯と名付申候。理中湯・附子理中湯、張仲景の方にて御座候。三方用法の差別大略如此二候。

⑥ 一、臍風撮口は一病二而候哉、又別病二候哉之事

古き説にハ撮口と申候ハ其見証、目黄赤・氣喘、啼声出不申候。此病は小兒胎熱之毒を心脾の二臟へ流し候故、舌強・唇青・撮口・聚面、乳を吮（14ウ）不申候。此証七夜之内ニ出候へは篤疾ニ而治兼候旨、古人申置候。又臍風と申候は面赤く喘急仕、啼声出不申、臍腫突出候而腹脹滿、日夜多啼、乳を飲不申、甚きハ発搐口噤し撮口仕候。此病は初而生下時、臍帯を断候後、風湿乘し或ハ尿湿褌裙に在之、遂に此病に相成申候。又臍を拭ひ候而乾不申、風入候して撮口と相成申候旨、臍風・撮口一病に仕候説も有之候。又病因は二ツに候へ共、水湿風冷之外因より発候は治申候得共、真陽不足の内因よ（15才）り発り候ハ原父より稟候儀ニ付、発候而は一兒も治不申候と申候説も有之候。右之通区々ニ御座候間、相尋候儀ニ御座候。

⑦ 一、小兒之痢と驚風と一病二而候哉、又別病二而候哉之事
驚風と申候病名、古に無之候。大抵、宋之聖恵方に出候より始り候儀ト相見申候。宋之劉昉が幼々新書に、小兒驚痢、

古之医書に但陰痢陽痢と申候を、今の人急慢驚風と言と有之候。其以後之書にも慢驚 古ハ陰痢と云、急痢 古ハ陽痢と云と申説多く有之候。病（15ウ）源候論・千金方等に論し候。陰陽痢之証候、全ク後世之慢急驚風と同様ニ御座候。又十歳已上を痢となし大人ニ癩と云、小兒に（原本「小」）痢と云と申候説、千金方等に見申候。此に依り候て見候へバ、痢ハ小兒一切目を引付候病の総名と相見申候。俗に申候癩痢と申候て俄に倒れ搖擗羸視仕、醒候前に沫を吐候証、急慢驚風之外に有之候。此亦痢ニ而五痢之差別有之候。此等之趣、方書の説区々にて分明ニ無之、治療ノ方も混雜仕罷在候儀ニ付、相尋候儀に御座候。（16才）

⑧ 一、痘疹、寒戦咬牙を發候は虚寒ニ属し候哉、毒盛に属し候哉之事

寒戦・咬牙ハ痘瘡之上にハ惡証にて、七八日の比迄ニ發候ハ多くハ火毒に属候故、格別恐候にも及不申候。七八日以後に發候ハ虚寒に属し候者多く候故、恐候事御座候。大抵、痘色紅紫、身熱・煩燥煩渴・大便秘・小便赤澁・脈沈数有力等之証ハ火毒にて御座候。又痘色淡白、皮薄く煩陥り、身涼く惡寒、大小便清利仕、脈浮虚或沈遲に候ハ虚寒にて御座候。又先ツ寒して後（16ウ）に戦候ハ寒極之証、先戦して後に寒候ハ熱極之証杯申候見分も有之候。然る処、識見之偏なる流儀ニ而ハ、或ハ火毒或は虚寒と一概に相心得候も有之哉ニ付、右之趣相尋候儀に御座候。

⑨一、小兒繼病ト疳病ト見分如何之事

おとミ病と申候ハ、先乳給候小兒有之、亦其母懷妊仕候へば右之小兒相煩申候。其証、寒熱時出少々ツ、下利有之、髪毛うすくなり、甚気重ク腹脹り青筋出、大便の色青く時々吐も有之、面の色つやも青黄にて漸く羸瘦仕候て(一七才)疳と相成申候。必竟、母妊娠仕候て、乳少ク脾胃の養薄く、又飢候ニ任せ食物過候より右之証を発申候。然る処、千金方以来、妊娠仕悪神其腹中の胎を導き、先に生れ候小兒を妬嫉仕候より右之証発り候と申候説有之。又ハ保幼大全にハ甚疳に似たり杯、疳とは別証之趣に門類立テ罷在候処、今日見受候へハ漸々疳証に相成り候者有之候ニ付、古来の別証に仕候説に依り見分方如何と相尋候儀ニ御座候。其二得と承り、經事留り候儀無之哉否(一七ウ)「旨等承り糺、弥おとミニ候は別の乳を与へ手充仕候へバ早速治申し候儀に候へども、疳証に相成候而も矢張りおとミとのミ心得、疳病の治療不仕候而も甚手抜ケニ相成候ニ付、是等の儀も如何相心得居り候哉と旁相尋申候儀ニ御座候。おとミ病、病源候論・千金方等にハ疳病と有之候。幼々新書にハ繼病とも申候旨出申候。元の曾世榮が活幼口議に萎怯して無辜となり候と有之候。無辜ハ疳中の六ヶ敷証にて御座候。陳復正が幼々集成にも疳(一八才)病の内江疳病ヲ一門に説込ミ候而、疳病竟に疳証となり候段、委ク申述置候。又保嬰撮要にハ六君子湯・益黄散・異功散・補中益氣湯之類、用有之候ハ専ら補脾の事ニ而候。是等ハ脾胃虚ニ依り候て発候ものに用候ニ御座候。

⑩一、五軟之儀如何之事

五軟は頭項軟・手軟・脚軟・身軟・口軟ニ而、何も父精母血不足ニ而生下虚弱より起り申候。其内、頭項軟は頭項力無之、肝腎筋骨を養不申より出申候。手軟ハ手ニ而物を擡げケ候ニ懶ク、脚軟ハ足細(一八ウ)「く行歩出来不申、行遅とも申候。身軟は肌肉軟とも有之候。肉少ク皮膚自ら離レ候を申候。口軟は二説有之候。舌を口外に出し言語仕候にもものうく候を申候と申説有之、又語遲と申候而小兒の言語遲きを申候と申ス説も有之候。何れ此五軟ハ胎元より怯弱にて寒暑共ニ耐兼候より生し候病ニ付、脾肝腎三歳を大補仕候事專一に候内、次第も御座候儀ニ付相尋候儀ニ御座候。但前文認候五軟ハ医学入門等に出候説ニ而御座候。又明の錢宏が小兒袖珍にハ頭軟・項軟(一九才)「手軟・脚軟・肌肉軟ト六軟ニ仕候。又清の馮兆張が錦囊秘録ニは頭項軟・手足軟・身軟・口軟・肌肉軟と立申候。此外書(に)より少しツ、異同御座候。

⑪一、小兒、変蒸虫積之発熱と外感之発熱と辨別如何之事

変蒸は俗に申候小兒のちへほとり之事ニ而御座候。此儀は小兒生下仕候而三十二日一変仕、又六十四日目二一蒸仕候。變と申候ハ五歳を變生仕、蒸と申候ハ六府を蒸養仕候而、氣血を長じ精神を生し智慧を益申候。右之如く段々(一九ウ)「積り候而五百七十六日ニ而畢り候。其候ハ体熱・微驚・耳聾冷、上唇頭に白泡起こり魚目珠子のごとく、脈乱レ或汗出或ハ汗不出、乳を吐し候等の証を見シ候。軽きハ三五日に愈

候。重き八十日にして愈候旨、病源候論以後小兒科諸書ニ出申候。然るに明の張介賓景岳全書に、右様に日数を限り発熱出候証は一見も見聞不仕、右之古説に拘泥仕間敷旨相見へ申候。清の陳復正が幼々集成にも同様ニ論し申候。只今心掛見聞仕候処、介賓・復正申候通り、定期有之候而(20才)発熱仕候ハ相見へ不申、大抵小兒発熱驚惕仕候ハ内傷又ハ外感より起不申ハ無之候。右三ヶ条相尋候主意ハ、外感発熱・虫積発熱、世上小兒多く相尋候候証ニ付、若麥蒸之熱と申候儀、耽と有之候儀と相心得、外感・虫積を交蒸の手充仕候而ハ治療手違之筋ニ罷成、害をなし候儀御座候間、心得之趣を相尋候儀ニ御座候。

⑫一、虚痘実痘、初中末手充差別之事

虚痘・実痘之儀は前条ニ相認候通り八証にて御座候。此八証を見分候上に四節と申候儀を(20ウ)以て療治仕候。四節とハ先序熱之節に升陽發表之劑、其次起脹之節に清熱解毒之劑、又其次灌膿之節に托裏行漿之劑、尚又其次収(原本「攸」)醫之節にハ補脾滲湿之劑相用候事ニ御座候旨痘科鍵に相見申候て、諸家共ニ治法大意同様ニ御座候。然る処八証之趣次第にて臨機応変ニ仕、初中末共温補托裏之劑を相用、又初中末共清熱解毒之劑を相用、或ハ攻補兼施、又ハ初補後寫・初寫後補申候等は医者之手眼に御座候て利(21才)害懸隔仕候ニ付、心得之大凡を相尋候儀ニ御座候。(21ウ)

外科之部

①一、癰疽辨別之事

癰は靈樞・癰疽篇に其皮上薄く沢ありと有之候。病源候論には癰は六腑不和ニ因り候而生シ候故、表を主と仕候。此故に浮浅にして皮薄く沢申候。疽は靈樞・癰疽篇に上之皮して堅く、上、牛領之皮之ことくなりと有之候。病源候論にハ五藏不調仕候而生し候故、裏を主と仕候。故に腫深く厚く其上の皮堅く候。(22才)劉涓子の鬼遺方に、癰の痛ハ只皮膚の上の有之、火にて茅を焚候ことく、初ハ黍米の大きにて三兩日を過ぎ掌の大的ことく五七日にて挽の大きことく相成り、治し易く候。又疽は初は小癰のことく触候得ば心江徹して痛、四辺微ク起り橘皮のことく色紅赤、膿水多く出ず、治し難く候旨有之候。又病源候論に二寸より五寸に至り候ハ癰と仕、寸より一尺に至り候を疽と仕候と申候説も有之候。癰疽ハ腫物中之大病にて外科専要之儀に(22ウ)付、看別之法相尋候儀に御座候。

②一、癰疽五発之事

楊仁齋直指方に、五発と申候ハ発腦・発鬢・発眉・発頤・発背にて、癰・疽・癌・癩を五発と仕候ハ俗説にて不宜旨相見申候。乍然直指方以後之書には多く癰・疽・癌・癩・癩の説相見候。是又一説二而一概に不宜共難申候。又齊徳之の外科精要にハ癰疽の腦・背・眉・髻・鬚・鬚ニ生し候を五発と

仕候。

③ 一、膿之有無并ニ深淺辨別之事

病源候論ニ、按之候而牢硬ハ未膿を^{かた}持不申(23才)、按之候而半硬半軟なるハ膿を持候。又手にて其腫物の上を掩ひ見候に熱^{あつ}からざるハ膿無之候。若熱甚きハ膿持申候。膿之有無右之通りニ而御座候。直指方に強按(原本「痛」)候て後に痛候は膿深く候、少し按候而直に痛候ハ膿浅く候。膿之浅深看法、右之通ニ候。此二条、外科先務ニ付相尋候儀ニ御座候。

④ 一、附骨疽多骨疽之事

附骨疽ハ其故無之骨ニ附候而膿をなし大筋解中に著候旨、千金方に見申候。又外科正宗ニは(23才)、附骨疽ハ陰寒骨ニ入候病ニ而、初起ハ寒熱交作仕風邪のことく、其後、醫腿筋骨痛を作し、其処不熱不紅、其疼骨に徹して甚く曲伸転側なり不申、日久クして陰変して陽となり寒化して熱となり、肉を腐し膿に相成候を附骨疽と申候。多骨疽ハ瘡の口より骨を出し候病にて、瘡瘍久く潰へ氣血其処を營養不仕、邪氣陥襲仕候て久く候得は、筋を爛し骨を腐し候而毒氣結聚仕、化して大骨を生し候旨、外科枢要・外科正(24才)「宗等に相見申候。多骨疽、又ハ骨疽又ハ刺骨離など申候。右二証、明に別病ニ候処、世上外科、多骨疽を附骨疽と唱、附骨疽を風毒腫など呼候者多く有之候間、右様之心得違無之哉ニ付相尋候儀ニ御座候。

⑤ 一、金瘡腸出候手充之事

金瘡、腸出候共、其腸断不申は皆療治相成申候。若其腸全断候は療治成不申候旨、得効方に相見申候。又証治準繩には、凡腸出候は其病人之手を医者之肩^{うでかた}に搭、其左右に隨て収(原本「攸」)候に麻油にて(24才)「瘡口を潤し腹内江整入、却而通閑散と申候散葉を鼻孔江吹込、嚏をいたさせ候へは其腸自然と取り入申候。扱白皮線を用ひ皮を縫合セ申候。又腸出候ハ其病人の手を釣り起し、醋にて山豆根を煎し候て其汁を一口服し二口程服たる時、却而針を以而病人の頸上を刺候へば其腸自然と入申候。又若腸上に小孔有之候ハ、灯火にて照し見候へバ其腸中より其灯火を吹き射候ハ治かたく候。又凡肚の皮を傷破仕、孔大なるハ腸と脂膏と俱ニ出申候。是を收入候而縫申候。若孔小なるハ手ニ而(25才)「其膏を撃去申候。膏斗り出候程なる小孔ニ候ハ、縫不申候。此膏脂、腹中江入候へは反て禍をなし候事ニ付、撃去て候ても妨に相成不申候。又蛮法ニ而は金瘡腸出、泡漲仕候而収(原本「攸」)り不申候ハ、銀針の大き常の物縫針より大きな者にて刺候事數度仕候へハ氣洩レ候て腸萎候間、法のことく收入候事ニ自由に相成申候。

⑥ 一、癰疽虚実辨別之事

其状、腫高く焮痛堅硬にて膿水稠粘なるは実と仕候。腫^{ひき}く微く痛み軟慢にて膿水清稀なるは(25才)「虚と仕候。右之趣、外科精義・外科枢要等二見江申候。

⑦一、疔瘡と類瘡との辨別之事

類瘡と申候儀、此邦之医者多く唱へ候儀にて、面部其外之小瘡痛強く勢少しく甚きものを類瘡と申候。唐土之書に申候処の瘡癰にて御座候。世上多く唱候儀ニ付、疔瘡との辨別如何と相尋候儀ニ御座候。疔瘡は其形釘の蓋のごとく二候ゆへ疔瘡と名付申候。初生ハ一頭凹腫痛仕、色ハ青黄赤黒俱に有之、定り候儀ハ無之或ハ水泡のごとくにふくれ或其辺麻木いたし、盤根突起仕候而焦黒に變し漸々腫大(26才)にて光り有之、逐々湿爛となり孔深くして肌ニ透り大針ニ而穿候状のごとくに相成り申候旨、諸外科書に見申候。瘡癰ハ俗ニ申候ねふと之類にて、素問・生氣通天論之王氷注ニ、瘡ハ色赤く膿憤候而内に血膿を盪候。形小にして酸棗のごとく或は豌豆のごとくと有之候。病源候論に癰ハ腫を結候事梅毒のごとくと有之、又千金方に腫根一寸已下を癰と名付、豆粒大のごときものを癰と名付と有之候。何も世に申候類瘡の儀ト相見申候。(26ウ)」

⑧一、魚口・便毒辨別之事

便毒の潰破仕、瘡口斂り不申候を魚口ト申候。万病回春・外科正宗等ハ左を魚口ト仕、右を便毒ト仕候旨相見江申候得共、此説不穩候。医宗金鑑に、潰候後に魚口ト名付候は、摺紋縫中に生し候故、其瘡口潰て大ニなり、其身立候得は瘡口合し身を屈候へは其口張り候而、形魚口の開合仕候状ニ似より候間、魚口ト名ケ候旨ニ御座候。

⑨一、金瘡出血不止手充之事

金瘡の初に出血するハ自身の小便を以て淋洗すべ(27才)し。其功能、痛を止て不潰候旨、外科大成に出申候。又得効方にハ白石灰末多少に拘らす韭菜之汁ニ調へ陰乾し末となし少許を擦候へば少時にして止血候旨有之候。又医宗金鑑に肉破れ損し血流注して不止ハ桃花散を撒_ひ申候。重き者、筋断血飛候は大脈已に傷候ニ付、如聖金刀散を撒_ひ候て其上を絹帛ニ而紮仕候へは止血申候。若復流候者ハ再応撒候儀ニ御座候。(27ウ)」

口科之部

①一、喉痺・乳蛾之事

喉痺ハ喉の中腫塞り痛有之、唾も食も納り兼、或腫候而膿を持候も有之候。乳蛾ハ喉閉と申候而、上腭ト喉トの界の処腫痛仕候証にて、其状円く腫起り左右共ニ生し候を双乳蛾と申、左か右か一偏腫候を単乳蛾と申候。此二証共ニ上焦熱鬱より起り申候。何れも世上多く有之、口科手馴レ居り不申候ては相成不申候証に付、相尋候儀ニ御座候。古ハ此二証総而喉痺と唱へ申候。後世ニ至り候てハ十八般の喉病等の名目有之候。先其内の二証を挙げ申候。(28才)」

②一、重舌・痰包差別之事

重舌は舌の根に小なる舌を生し其腫硬く飲食語言に障候。心火の盛なるより発し候。又痰包ハ重舌同様に候へ共、胞腫綿軟と有之候而丸くやわからかに硬く無御座候。是ハ痰飲流行

仕、舌下に凝り候ものにて、針にて破候へハ黄痰出候て愈候。
二証同様に候へとも治療相違仕候ニ付相尋候儀ニ御座候。

③一、走馬牙疳治法之事

走馬牙疳ハ急疔とも申候至而迅速なる証にて、痘瘡麻疹の
餘毒、又ハ他病熱毒甚きより発し申候。(28ウ)「初発、齒
齦色変、臭多有之候節、早速治療加へ候得は治候儀も有之候
得共、其状、牙根爛黒く腐れ臭気甚く牙齦脱落仕、又ハ腮を
穿ち唇破れ鼻に及び、其上、不食・痰涎壅盛・呼吸喘息等の
証発し候ニ至候てハ必死之証ニ御座候。此証誠ニ急卒の証に
て尋常の薬にてハ救候儀相成不申候。外付の薬にハ膽礬・銅
緑・輕粉・人中白等入候方劑相用、内薬にハ清熱解毒を専ら
相用候事ニ御座候。乍然、甚六ヶ敷病にて五不治之候有之候。
口臭涎穢者一の不治、黒腐脱不申者二の不治、牙落て血無之
者三の不治、腮を穿(29オ)ち唇を破り候者四の不治、用
薬効無之者五の不治と仕候。此証急証に付、兼々心得無之候
而は相濟不申事ニ付、相尋候儀ニ御座候。

④一、齒齦・宣露之事

宣露と申候ハ齒齦の肉しさり齒根あらわれ候にて一名齒挺
とも申候。是に虚実の二証有之候。氣熱伝て齒齦に至り液沫
膿となり肉消して齒根露れ候ハ実証ニ属し候間、清涼の薬相
用申候。又左ハ無く只齒齦の肉漸々消し齒挺出仕、或ハ少々
ツ、痛有之候ハ腎氣之虚と仕、滋補之薬相用候儀ニ御座候。

(29ウ)「

⑤一、世ニ云舌疽の事

舌疽と申候病名、唐土の書に見不申候。本邦口科の唱候名
にて御座候。其証、初ハ舌に核を生し、或は少々破裂の処有
之漸々潰爛仕岩穴のとき状をなし、或ハ鬚花仕或失血仕、
毒根甚深く氣血消尽、死に至り申候。又黴毒にて発し同様の
証を見し候も有之候。この舌疽も初起ハ治候。黴毒にて発候
ハ先ハ多く治申候。何れ此証、唐土方書に見不申候儀故、銘々
家方可有之事ニ付、治療手充之大概相尋候儀ニ御座候。(30
オ)「

寅九月 多紀永寿院

多紀安長

山本宗英

吉田快庵

桂川甫周

山崎宗運(30ウ)「

※本稿は文部科学省科学研究費助成・特定領域研究A(2)「江
戸のモノづくり」研究の一環である。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)

(二松学舎大学・北里研究所医史学研究部)